

拝啓「何事も、運が良かったとか悪かったとかでかたづけしてしまう人たち」様

「その『運』という言葉をもし嘆いて言っているようならば、そういう言葉を吐く前に、自分の能力や可能性や実力を高める努力を惜しまないべきじゃないでしょうか……」

何事も、運が良かったとか悪かったとか、そういうひとことでもかたづけしてしまう人に、私はときどき出会います。そして、そのたびに私は、その人が自分の人生に対して真っ向から勝負してないよな、自分で自分を慰めているよな、その人の逃げ口上を聞かされているよな気分さらされてしまいます。そういう人の視線は、人生のうわべの所だけしか見ていません。その奥に流れている本質を見ていません。

“運命論者”というのは、ただの聞こえのいい言葉であって、それは、運命という言葉に自分の人生を預けてしまい、その責任まで負わせてしまっている、逃げの姿にしか私には見えません。それは、そのすべてに自分自身をかけ、そのすべてに責任を負ってやろうじやないかという勇気がない。ただの臆病者にしか、私には見えません。

原宿を歩いていて、スカウトに声をかけられ、気がつけばすごい

人気者になっていた人がいます。そういう人たちを、何事も運が良かったとか悪かったとかでかたづけしてしまう人たちは、まさに、その“運が良かった”というそのひとことでかたづけてしまいます。

「もしその日、そしてその時間に原宿に行っていなければ、あんな大スターにはなれなかった」と、かたづけてしまいます。たしかにそうかもしれません。その日にその時間に原宿に行っていなければ、そういう人たちの言う通り、そんな大スターにはなっていなかったかもしれない。しかし、私が言いたいのは、それはうわつつらの偶然の出来事だけしか見ていないということです。

原宿を歩いていれば、誰でも彼でもスカウトに声をかけられ、スターになれるというものではないのです。くさるほど、イヤになるほど人が群がっている原宿で、その姿とか顔とか、その人の持っている雰囲気とかだけで可能性を感じさし、スカウトの心を動かし、声をかける気にさせたのです。これはもう、立派な才能です。姿、形なんでいうのは、その人の持って生まれたものかもしれませんが、立派な才能です。“運が良かった”かもしれませんが、その“運が良かった”の向こうには、ちゃんとそういう才能という理由があるのです。言い換えれば、才能があるのですから、その人の持っている実力とも言えません。

そういう人たちは、そういう部分を見られないのか、見ようとならないのか、よくわかりませんが、そういう部分を語ろうとしません。原宿を歩いていただけでスカウトに声をかけられ、スターになってしまったような才能を持っている人間は、私からすれば、別の日その時間に原宿の町を歩いていなくてもいずれどこかの町や場所で目にとまり、スカウトのような人たちに声をかけられ、人気者になっていく可能性が十分に考えられます。そして、もしそうになったら、何事も運という言葉でかたづけしてしまう人たちは、またその声をかけられた場所を指して、同じように「その日その時間にその場所を歩いていなかったら……」ということで、かたづけてしまうでしょう。

そういう才能や実力が無い人間が、いくらどんな町やどんな場所を、そして偶然そういうスカウトの人の前を何度も行ったりきたりしてしまうほどの大きなチャンスにめぐり逢えたとしても、絶対できないようなことを、ただある日その町を歩いていただけで、結果的にスターになるということを成し遂げてしまう才能があるものに対して、“運が良かった”このひとことでかたづけしてしまうのです。

私はなぜか“運が良かった”とかたづけしてしまう人たちの、その

“運が良かった”というセリフの響きのあとに、「だから私の場合は、そういう運がないから成功してないんだ」とか「できなかつた」とかいう、いいわけを感じてしようがありません。自分の才能とか現在の實力とか、そういう部分に目を向けず、そのすべてを運のせいにしてしまう卑怯な部分を感じてしようがありません。結局は自分というものに自信がないんだろかなあと思ってしまう。そして、その自分というものに自信がないのを、認めるのが怖いんだろかなあとも思えてしまいます。きっと、そういう人たちは、そのすべてを“運”という言葉でかたづけ、自分で自分の心を無意識に慰めているかもしれません。

私たちが昔やっていたグループの場合もそうでした。よく言われるのが「おまえら、漫オブームだったから良かったよなあ」です。たしかに、そうかもしれませぬ。でも私から言わせれば、ブームだったからこそ、くさるほどそういう奴らがいて、競争がもっと激しかったということ。倍率が非常に高かったということ。です。

それから「横澤さん（元フジテレビプロデューサー）にめぐり逢えて良かったなあ」「これもよく言われました。しかし、横澤さんも当時は、そういう人材を血まなこになって探していたはず。ということは、我々に限らず、くさるほどの漫才師やコントマンを、横

澤さんからすれば見てきたはずです。それを“めぐり逢い”というのであれば、たくさんの将来を夢見るお笑い芸人が、横澤さんとめぐり逢っていたはずです。その中で横澤さんは、私たちに目をつけてくれたのです。ただめぐり逢えばいいというものでもありません。

それから『笑ってる場合ですよ』という番組で売り出してもらったんだもの、ホント運がいいよなあ、これもよく言われました。たしかにそうかもしれませぬ。しかし、それはただのチャンスをもらっただけで、売れる売れないは別のものです。最終的には、ステージに立つのは私たちです。どんなにお膳立てされても、最後には私たち自身がおもしろいか、おもしろくないかという戦いに勝たなければいけません。そのあたりまでくれば、要するにそういう力があるかないかそれだけの話です。“運”だけの言葉では決してかたづけられないものが、要求されるのです。どう考えても“運”という言葉だけで物事をかたづけしてしまうのは、実におかしい話です。“運”という言葉を、ただの偶然の産物のようにとらえすぎです。そういう人たちの言う“運がよかった”という結果の、その“運”を呼び込むのは、必ずその人の能力や力が前提になければ成立しない話です。ですから逆に言えば、これは私の持論ですが、才能や力さえあれば、そういう人たちのよく言う“運”というものを必

ず呼び込めると、私は思っています。

「運がない、運がない」とよく言う人がいます。私から言わせればそれは正確には「才能がない、力がない」ということです。そういう人たちにだって、絶対何度かチャンスというものがあつたはずなのです。ただそれをそういう人たちはものにしてないだけの話なのです（ものにする以前に、本当はチャンスなのに、それをチャンスだと気づかない人もいます）。それは“運”がなかったのではなく、何度も言うようですが、正確に言えば、ものにするだけの才能や力がその時点ではなかったただけの話なのです。そして、そういう人たちの最後の言葉が決まって「俺には運がない」という聞こえのいい言葉になって、自分の口から正当化するよう出ていってしまうのです。

私はこの世界でのし上がってきた人、売れた人を、その過程がどういふものであれ、素直に尊敬します。敬意を表します。そのうえ、長くしぶとく生き残っている人は、もっと敬意を表します。それは、年が若かろうが、年をとっていようが、関係なくです。それは、能力のないものが、決して売れたり生き残ったり、絶対できない世界だからです。“運”だけで、絶対そういう状況を勝ちとることができない世界だからです。

拝啓「何事も運が良かったとか悪かったとかでかたづけしてしまう人たち」様、その“運”という言葉をもし嘆いて言っているようならば、そういう言葉を吐く前に、自分の能力や可能性や実力を高める努力を、惜しまないですべきじゃないでしょうか……

追伸

私がここで書いた“運”というものに対する考え方は、あくまで我々のような世界とか能力が要求される社会においてだけを前提にして言ったものです。よく飛行機に乗り遅れて、その乗るはずだった飛行機が墜落してしまったとか、そういう話はありませんし、よく聞いたりします。そういうものに対しては、それこそ“運が良かった”とか“運が悪かった”とか、そういう言葉でしか表せないものがそこにはあるでしょう。それに関しては、私もたしかにそう思うしかないと思っています。

失礼